

Formula NIPPON NEWS 2010.11.7

全日本選手権フォーミュラ・ニッポン

Rd.7 最終戦・決勝 [鈴鹿サーキット]

2010 年全日本選手権フォーミュラ・ニッポン 最終戦 決勝 Race1,Race2**Race1 は No.1 ロイック・デュバル(DOCOMO TEAM DANDELION RACING) が優勝、****Race2 は No.19 J.P・デ・オリベイラ (Mobil 1 TEAM IMPUL) が優勝、タイトルを獲得!!**

午前中は曇りがち。午後からは昨日と同様、晴れ間がのぞいた三重県・鈴鹿サーキット。2010 年全日本選手権フォーミュラ・ニッポンはまさに、タイトル争いにふさわしい激戦となった。午前中に行なわれた 20 週のレース 1 では、ポールポジションの No.1 ロイック・デュバル (DOCOMO TEAM DANDELION RACING) がスタートでトップを死守。途中からはトラブルを抱えながらも、そのまま逃げ切って優勝する。2 位に No.32 小暮 卓史 (NAKAJIMA RACING)、3 位に No.36 アンドレ・ロッター (PETRONAS TEAM TOM'S)、ランキングトップの No.19 J.P・デ・オリベイラ (Mobil 1 TEAM IMPUL) はスタートで出遅れ 4 位となり、ロッターには 0.5 ポイント差、デュバルには 2.5 ポイント差まで迫られる結果に。しかし、28 周で争われたレース 2 では、そのオリベイラが優勝。2 位にロッター、3 位に小暮、4 位にデュバルという結果になり、オリベイラがシリーズ復帰初年度にして、見事にチャンピオンタイトルを獲得した。

ひんやりとした曇り空のもと、午前 10 時 20 分、レース 1 のフォーメーションラップがスタート。この時点で気温は 14、路面温度は 16 と、予選が行なわれた昨日に比べ、かなり低い状況となった。このコンディションに合わせてのマシンセットアップを 8 分間のウォームアップで確認した後、各車はダミーグリッドにつく。そしてフォーメーションラップを終え全車が正規グリッドに着くと、シグナルオールレッドからブラックアウト。ここで抜群のスタートを決めたのが、ポールポジションのデュバルだった。予選 2 番手のオリベイラは、スタートに失敗。小暮はこれをかわし、2 番手に立つ。さらにロッターが続き、オリベイラは 4 番手まで後退した。この後はトップのデュバルが後続を引き離す展開。3 番手のロッターが 2 番手の小暮の背後にピタリとつけ、オーバーテイクのチャンスをうかがった。その後デュバルのペースが若干鈍り、3 台はそれぞれ 1 秒以下の差で周回。そしてトップを走るデュバルのマシンに、レース中盤の 10 周目あたりからトラブルが発生する。これは、ミッションオイルクーラーに異物がぶつかり、亀裂が入ったため。そこからミッションオイルが少しずつリークし始めたデュバルのマシンは、白煙をあげながらの走行となる。しかしマシンの操作自体には問題はなく、デュバルのペースは落ちなかった。一方、これを追う小暮とロッターはオイルと白煙が視界に影響し、デュバルを攻略することができない。結局、デュバルはそのまま走り切り、今季 2 勝目をマーク。2 位に小暮、3 位はロッターという結果になった。オリベイラはこのレースでのマシンバランスがオーバーステアだったということで、なかなかペースを上げられず、4 位のままフィニッシュ。この結果、シリーズポイントでは、オリベイラが 39.5 ポイント、ロッターが 39 ポイント、デュバルが 37 ポイント、小暮が 35 ポイントと、レース 2 に向けて、タイトル争いはさらに混沌としてきた。

約 3 時間半のインターバルを経て午後 2 時 30 分、レース 2 のフォーメーションラップがスタート。第 1 レースの後、太陽が顔を出した鈴鹿は気温 19、路面温度は 27 まで上昇し、昨日の予選同様の温かなコンディションとなった。このレースでは、タイヤ交換が義務づけられ、トップが 10 周回を消化した後に全車ピットに入らなければならないということが決められていた。そのため、どのドライバーがどこでピットインし、どのような作戦を採るかということもレース結果を左右するものと思われた。そして 1 周のフォーメーションラップを終えると、シグナルオールレッドからブラックアウト。ここで今度はまずまずのスタートを決めて、ポールポジションのオリベイラがトップを守ったまま 1 コーナーへ。これに小暮、No.31 山本 尚貴 (NAKAJIMA RACING) と続くが、1~2 コーナーの真ん中あたりで大外から加速してきた予選 5 番手のロッターが山本を攻略。3 番手まで浮上する。これに山本、デュバルが続いた。その後、小暮がハイペースでオリベイラを追い詰め、トップ争いは 1 周目から白熱。2 周目の 1 コーナーでは、小暮がアウト側からオリベイラをオーバーテイクする。トップに立った後も、小暮はただひとり 1 分 43 秒台のタイムを連発し、2 番手以下を引き離していった。また 2 番手のオリベイラと比べペースが伸び悩んだロッターもジワジワと引き離され始め、後方の山本に迫られることになった。一方、レース 1 で見事な優勝を果たしたデュバルは、右フロントタイヤに異変を感じながらの走行。この影響からかマシンは

Formula NIPPON NEWS 2010.11.7

全日本選手権フォーミュラ・ニッポン

Rd.7 最終戦・決勝 [鈴鹿サーキット]

アンダーステアとなりコントロールに苦しみ、全くペースを上げられなかった。

そしてトップの小暮が10周を消化したあたりから、各車続々とピットイン。10周を終えたところでNo.37 大嶋 和也 (PETRONAS TEAM TOM'S) その翌周にはNo.20 平手 晃平 (Mobil 1 TEAM IMPUL) No.8 石浦 宏明 (Team LeMans) No.2 伊沢 拓也 (DOCOMO TEAM DANDELION RACING) No.18 平中 克幸 (KCMG) 12周を終えたところではNo.3 松田 次生 (KONDO RACING) とピットに入ったが、タイヤ交換本数は2本、4本と、それぞれの作戦で分かれる。上位陣では、13周を終えたところでまず、真っ先にデュバルがピットイン。不具合を抱えていた右のフロントタイヤ1本だけを交換し、コースに戻った。同じ周にピットインしたNo.10 塚越 広大 (HFDP RACING) も、左リヤのみの1本交換。事前に予想されていた通り、1本交換を行うドライバーが現れ始める。一方15周を終えたところでピットに入った山本は、タイヤを4本交換した上に、給油も敢行。この結果、デュバルの先行を許すことになる。さらに17周を終えたところでピットに入った小暮も、同様に4本のタイヤを交換した上給油を行った。小暮はピットインの前の周に2番手のオリベイラに対し8.5秒以上のマージンを稼いでいたため、ピット作業に時間がかかっても優勝を狙えるものと思われた。ところが、このピット作業中に小暮は痛恨のエンジンストール。再スタートまでに23秒1という時間を要し、ピットイン前に稼いだマージンをフィニッシュしてしまう。これを見て翌周に動いたのがMobil 1 TEAM IMPUL。オリベイラは18周を終えたところでピットに入るとリヤタイヤのみを交換し、悠々と小暮の前に出た。さらに、20周を終えたところで、ロッテラーがピットインし、右リヤのタイヤだけを交換する作戦を採る。コースに戻ったロッテラーは、ここで小暮の前に出ることに成功。2番手に浮上した。その後はオリベイラが安定したペースを刻み、トップを堅持。今季2勝目を挙げるとともに、シリーズチャンピオンを決めた。予選5位から2位まで浮上したロッテラーは、わずかに及ばずランキング2位。山本と平手に追われながらも4位を守り切ったデュバルがランキング3位。小暮はランキング4位でシーズンを締めくくった。また、チーム・タイトルはMobil 1 TEAM IMPUL、ルーキー・オブ・ザ・イヤーは山本が獲得している。

Formula NIPPON NEWS 2010.11.7

全日本選手権フォーミュラ・ニッポン

Rd.7 最終戦・決勝 [鈴鹿サーキット]

決勝 Race1 トップ3 ドライバー・監督コメント

レース2も、勝つことしか考えていない

1位：ロイック・デュバル (DOCOMO TEAM DANDELION RACING)

チャンピオンの可能性をつなぐためには、まずこのレース1で勝つ必要があったし、それが第一目標だったから、実際に優勝できてハッピーだよ。でも、とてもタフなレースだった。スタートではポールポジションからトップを守ることができたけど、その後トラブルを抱えることになってしまったからね。最初はヘアピンの立ち上がりでマシン後方から白煙が見えて、「ホイールスピンしたのかな？」なんて思ったんだけど、その後、どんどん煙が出続けるようになった。だから、チームにも無線で報告はしたんだけど、「今、僕たちに出来ることは何もないから、そのまま走り続ける」と言われたんだ。もちろんいい気分ではなかったし、トラブルが出てから、ペースを保つことができるだろうか、ちょっと心配になったよ。オイルがリヤタイヤにかかって、グリップをちょっと失っていたからね。でも、後方のライバルたちも僕のオイルで視界が悪くなってしまったと思うから、最後までトップを守るに十分なスピードで走り切れたと思う。とにかく最後までクルマが持つようになって、祈りながら走っていたんだ。ただ、このレースはひとつのステップだったし、それを乗り越えた今は、レース2のことに集中しないとね。午後のレースがとても大切だと思うし、勝つことしか考えていないよ。

レース2は勝つしかない

2位：No.32 小暮 卓史 (NAKAJIMA RACING)

スタートはすごくキマって、36号車と19号車の前に出るという、描いていたとおりの展開になりました。その後序盤はタイヤを温存して、後半勝負しようと思っていたんですけど、ロイック選手の出したオイルがかかって捨てパイザーをすぐに使い切ってしまう、前が見えなくなり、“無事に走りきることだけに集中、”という状況になってしまいました。でも2番手ということでチャンピオンになる可能性をなんとか残しましたし、良かったと思っています。アンドレ選手もペースが速く何度か迫られる場面もあったんですけど、向こうも同じ状況なのでパッシングはそう簡単ではないと思っていました。レース2はとにかく、勝つしかタイトルを獲得手段はない。2番手スタートなので、その可能性は充分あると思っています。相手のポイントによって、ということにはなりますが、相手のことは考えずに、自分が優勝することだけに集中していきたいと思います。

午後のレースも、楽しみにしているよ

3位：アンドレ・ロッター (PETRONAS TEAM TOMS)

何も特別なことはない、っていう感じのレースだったね。スタートは平均的で、1台に先行され1台は抜いたっていう状態で、そのあとはずっと3番手をキープして走っただけだった。もちろん、いくつかの機会を利用して小暮さんをオーバーテイクしようと試みた。僕のクルマはすごくバランスが良く、速かったからね。でも小暮さんは大きなミスを犯さなかったし、こういう短いレースでは、いくら自分のクルマの方が速くてもオーバーテイクするのは難しい。短いレースだと、どのドライバーも最後までタイヤの状態がいいしね。ただ、チャンスがあるとすればシケインかなと思っていた。だから最後の週のシケインでは、まだ届くほどではなかったけどそれまでの周よりは差が詰まったから、仕掛けてみたんだ。普通なら抜けないけど、もし小暮さんがビックリしてミスでもしたら、チャンスがあるかも知れないからと思って。でも、彼はミスしなかった。それで最後まで3番手をキープすることになって、ちょっと退屈なレースになってしまったけど、まずはJ.Pの前でゴールできて良かった。あとは、午後がどんなレースになるかな。もちろん5番手からだから、簡単ではないよ。でも、とにかくどうなるか、楽しみにしているよ。

Formula NIPPON NEWS 2010.11.7

全日本選手権フォーミュラ・ニッポン
Rd.7 最終戦・決勝 [鈴鹿サーキット]

目の前のレースで勝ちたいだけ

優勝チーム監督：村岡潔 (DOCOMO TEAM DANDELION RACING)

もちろん「うれしい」に越したことはないですね。レースに勝てる、ということが一番いいことです。幸せです。もてぎで勝ってから、その後も勝てるレースがいくつかあったので、チームのモチベーションとしては非常にいい状態でした。また、オートポリスの結果も逆に、モチベーションが上がる方向に働いたと思います。(マシンの修復で)コスト的には大変でしたけど。長い目で見るというよりもうちは、目の前のレースで勝ちたいだけなんです。ポールポジションを獲って勝ちたいだけなんです。その望み通りになって、良かったと思います。

Formula NIPPON NEWS 2010.11.7

全日本選手権フォーミュラ・ニッポン

Rd.7 最終戦・決勝 [鈴鹿サーキット]

決勝 Race2 トップ3 ドライバー・監督コメント

最後までプッシュし続けるレースだった**1位 : J.P・デ・オリベira (Mobil 1 TEAM IMPUL)**

すごくタフなレースだったよ。スタート前の段階で4人のドライバーにチャンピオンの可能性が残されていて、ものすごくプレッシャーがかかっていたしね。だから、何も間違いを犯すことができなかつたし、僕はとにかく自分のレース戦略に集中していた。その一方で、僕らは他のドライバーがどんな戦略を採るのかということにも気を配っていた。レースの最初から、小暮さんが僕らとはちょっと違う戦略を選んでいることは分かった。彼のクルマはちょっとペースが速すぎたからね。2周目に小暮さんに抜かれた瞬間は、少し心配になったよ。鈴鹿では前にいるってということがとにかく大切だから。クリアな状態で走れるからね。でも僕を抜いた後、アツという間に小暮さんが僕を引き離すのを見て、彼の燃料が軽いということに気づいた。だから抜かれた後は小暮さんのことは忘れて、自分のことに集中したし、あとはアンドレとの差を気にしていた。それでピットストップを行ってもこれだけのマージンがあれば大丈夫ということまで引き離せたので、少し気持ちが楽になったよ。でも、とにかく最後までプッシュし続けるレースだったね。ゴールの4~5周前には、もう大丈夫な位置にいると思っていたし、勝てるだろうと思った。そこからは常にペースをコントロールしながら少しセーブして、ゴールする時のことを考えていたよ。

出来る限りのことをやって、その結果が2位だったということ**2位 : アンドレ・ロッター (PETRONAS TEAM TOM'S)**

スタートはすごく良く、1コーナーにアウト側から入って行ったスピードを生かして3番手に上がることができた。今日のレースではそれが、とても大切なことだった。5番手からということで、リスクを背負って行かなければならなかったからね。そこからは、もっといいペースで走れることを期待していた。今朝のレース1を振り返れば、僕らのパッケージはすごく良かったし、セットアップも決まっていたし、もっと強いと思っていたんだ。でも、トップ2のクルマにはなかなか追いつけなかった。J.Pも僕と同じような作戦を採っていると思っていたんだけど、思うようについていけなかったんだ。僕のクルマは、レース1が終わった後の段階でスキッドブロックの厚みが規定内ギリギリのところまで減っていたから、レース2に向けては車高を少し上げなきゃならなかった。その影響があったのか、クルマはものすごく乗りづらかった。レース1と比べてタイヤの状態も良くなかった。ずっとリスクを背負って走っていた。ピットストップでは、タイヤを1本だけ交換したんだけど、それによって小暮さんの前にも出られたし、クルマのバランスも少し良くなった。とにかく僕らは自分たちに出来る限りのことをやって、その結果が2位だったということだよ。

エンジンスターールした瞬間は血の気が引いた**3位 : No.32 小暮 卓史 (NAKAJIMA RACING)**

レース1から大幅にセットアップを変えて、前半は本来ならもっとペースを上げていけるはずだったんですけど、すごく乗りづらかったというか、ドライビングの仕方を変えざるを得ない状況でした。後半も、もっと車のポテンシャルを引き出しながら走れるのかな、と思っていたんですけど、タイヤ交換した後、路面状況は変わっていないはずなのに全くハンドリングバランスが変わってしまって、追い上げることが出来ませんでした。ピットインに関しては、自分が優勝してオリベira選手が3位以下にならないとチャンピオンになれないということで、自分が勝って山本選手が2位というのを理想として、軽い状態でスタートしてピットで4本交換して給油をするという作戦を採りました。2周目にオリベira選手をオーバーテイクしたことについては、燃料搭載量が違うから加速も違いますし、当たり前なこと。このチームでは特に、過去にも2ストップ作戦をやったり、そういう状況でのオーバーテイクの経験も多少ありますし。エンジンスターールした瞬間は血の気が引きました。ピットストップでエンジンスターールというのはフォーミュラ・ニッポンでは一度もなかったし、最もやっては

Formula NIPPON NEWS 2010.11.7

全日本選手権フォーミュラ・ニッポン
Rd.7 最終戦・決勝 [鈴鹿サーキット]

いけない場面でやってしまったわけですから。本当に、いい車を用意してもらったチームに対して申し訳ないし、悔しい気持ちでいっぱいです。

今回は特に、ちょっと、「来ました」ね
優勝チーム監督：星野一義 (Mobil 1 TEAM IMPUL)

ドライバーにプレッシャーをかけても意味がないので、「頑張れ」とか一言も言わなかったし、自分自身も不思議なくらい、今日はノープレッシャーでした。作戦面では、ここ2戦のトムスさんの作戦が素晴らしく光って見えていて、今度はうちが作戦でお返ししたいからチームみんなの力で頑張ろう、ということになって、それが叶えられた。また今年のスタート時点でのいろんなことを思い出して、もちろん優勝の喜びはあるんですがそれ以上に今回は特に、ちょっと、「来ました」ね。やはり、レースは辞められないですね。辞めてのんびり草取りでもやろうとも思ったけど、オリベイラが頑張ってくれたんでね。オリベイラはこれでサンパウロにビッグなマイホームを建てるそうで、おめでとう(笑)！やはりみんながレースの世界で明るい夢を見られるようじゃないと、ね。

Formula NIPPON NEWS 2010.11.7

全日本選手権フォーミュラ・ニッポン

Rd.7 最終戦・決勝 [鈴鹿サーキット]

ドライバーズチャンピオン・チームタイトル監督

ルーキー・オブ・ザ・イヤーコメント

とにかく今はホッとしているよ

2010年ドライバーズチャンピオン

J.P・デ・オリベイラ (Mobil 1 TEAM IMPUL)

とにかく今はホッとしているよ。今年はとてもタイトな選手権で、最後のレースの前まで4人のドライバーがタイトルの可能性を残している状態だった。その中で、絶対にミスは出来なかったし、最終的にチャンピオンを獲得することが出来て、明日の朝目覚めた時に“自分がチャンピオンなんだ”と噛み締めることが出来るなんて最高だよ。この結果を導き出すためにチームが素晴らしい仕事をしてくれたことにも感謝しているし、僕のエンジニアを務めてくれた岡田(淳)さんにもとても感謝している。彼は今年、とても一生懸命仕事をしてくれたからね。特に、僕を最初に担当していたエンジニアの加藤(祐二)さんが(体調の問題から)チームを離れなければならなくなっただ後に、すごく頑張ってくれた。それで僕らは開幕戦の時とは違う方法で、自分たちが置かれた状況に順応させていかなければならなかったんだ。それに1年を通じて、星野さんが僕を支えてくれた。その支えがあったからこそ、僕はチームの中で居心地良く過ごすことが出来たと思うし、本当に感謝しているよ。1年間のブランクがあったし、開幕前は僕よりもこのクルマをよく知っていて経験豊富なアンドレやロイック、小暮さんがいたから、その中で戦うのは難しいなと思っていたんだ。でも、最初の2戦までを終えて、タイトルも夢じゃないと思えるようになった。僕自身、ある程度はフォーミュラ・ニッポンの経験があるし、今年チームが用意してくれたクルマは常に安定してスピードを発揮してくれた。それにチームととてもいい仕事が出来たし、多くのレースでいい判断が出来たと思う。もちろん、何回かはその判断が正しい方向に行かなかったこともあるよ。でも、チャンピオンシップを獲得するためにはそういう紆余曲折はあるものだし、誰にだってアップダウンはある。その中で、僕たちは多少の浮き沈みに左右されないだけのものを持っていたんじゃないかと思うし、それがチャンピオンを獲得出来た理由なんじゃないかと思う。

一人一人のスタッフがそれぞれ頑張った結果

2010年チームチャンピオン 監督：星野一義 (Mobil 1 TEAM IMPUL)

もっと早くチャンピオンを決めるチャンスはあったのですが、SUGOはガス欠で、オートポリスもピットインの作戦で落として.....まあ、悪いのは全部監督だから、すごくオリベイラ選手に対して申し訳ないと思っていました。でもなんとか最終戦ではオリベイラが普通に走れば勝てるように、タイヤは何本交換するかとかの作戦面でのミーティングをものすごく長く行なって、その通りに出来たスタッフの力とドライバーの速さ、つまりすべてのチームの力を出し切った上でのチャンピオン。何かひとつ欠けても駄目だったと思うし、こんなに嬉しく思ったのは久しぶりですよ。ですからチームみんなに感謝しているし、応援してくれた皆さんにも感謝しているし、トヨタさんにも感謝しています。今回は決してミスが許されない状況だったわけで、平手選手のピットインの時のミスは申しわけなかったと思っていますが、チームタイトルは一人一人のスタッフがそれぞれ頑張った結果です。本当に有難うございました。

チームが最高のマシンを作ってくれたおかげ

ルーキー・オブ・ザ・イヤー：No.31 山本 尚貴 (NAKAJIMA RACING)

率直な気持ちとしては、ルーキー・オブ・ザ・イヤーを獲れたのは自分の力ではなく、チームの皆さんがトラブルなく最高のマシンを作ってくれたおかげだと思っています。シーズンを振り返ると、一番つらかったのは開幕戦。初めてフォーミュラ・ニッポンのレースに出て、「体力的にもバトルも、こんなにタフでハイレベルなんだ」ということが分かって、これで一

Formula NIPPON NEWS 2010.11.7

全日本選手権フォーミュラ・ニッポン
Rd.7 最終戦・決勝 [鈴鹿サーキット]

年間戦えるのかと不安になるくらい、その凄さを体感したこと。そして夏のもてぎではフリー走行で2番になり、予選 Q1 ではトップになったことで手ごたえをつかんで流れに乗れました。そして最後の予選でトップ3に入れたことで、一年間やってきたことが出し切れたと思うし、ミスなく気持ちよくアタックが出来て、初めて記者会見に出ることが出来たことは印象的でした。レース2では、ロイック選手を「プッシュしろ」というチームの無線を聞いて、抜かないといけないと思っただし、開幕戦と同じ展開だったので一年で成長したことを見せるという意味では絶好のチャンスでした。そして一回仕掛けて前に出たんですけど、その時オーバーテイクシステムを使いきっていて、一方のロイック選手は温存していた。「まだまだ甘くないよ」ということを教えられたようで、それは悔しかったですね。

Formula NIPPON NEWS 2010.11.7

全日本選手権フォーミュラ・ニッポン

Rd.7 最終戦・決勝 [鈴鹿サーキット]

Rd.7 最終戦 鈴鹿・決勝 Race1 結果

鈴鹿サーキット (国際レーシングコース 全長 5,807km)

天候：曇り コース：ドライ 開始時 気温/路面温度： 14 /16

開始/終了時間： 10:24 ~ 10:58

Po	No	Name	Team	Time	Delay	Best time
1	1	ロイック・デュバル	DOCOMO TEAM DANDELION RACING	34 31.275		1 42.622
2	32	小暮 卓史	NAKAJIMA RACING	34 32.652	1.377	1 42.740
3	36	アンドレ・ロッター	PETRONAS TEAM TOM S	34 33.308	2.033	1 42.739
4	19	J.P・デ・オリベイラ	Mobil 1 TEAM IMPUL	34 35.282	4.007	1 42.991
5	37	大嶋 和也	PETRONAS TEAM TOM S	34 47.288	16.013	1 43.439
6	31	山本 尚貴	NAKAJIMA RACING	34 50.598	19.323	1 43.378
7	8	石浦 宏明	Team LeMans	35 03.818	32.543	1 44.206
8	16	井出 有治	MOTUL TEAM 無限	35 04.953	33.678	1 44.304
9	20	平手 晃平	Mobil 1 TEAM IMPUL	35 06.187	34.912	1 44.395
10	10	塚越 広大	HFDP RACING	35 08.331	37.056	1 44.554
11	2	伊沢 拓也	DOCOMO TEAM DANDELION RACING	35 10.987	39.712	1 44.381
12	18	平中 克幸	KCMG	35 11.385	40.110	1 44.334
13	7	ケイ・コッツォリーノ	Team LeMans	35 16.524	45.249	1 44.527
14	3	松田 次生	KONDO RACING	33 19.241	1Lap	1 44.457
-	29	井口 卓人	DELIZIEFOLLIE/CERUMO・INGING	34 26.258	10Laps	1 43.408

FASTEST LAP: 1'42.622 (2/20) 203.71km/h No.1 ロイック・デュバル (DOCOMO TEAM DANDELION RACING)

Formula NIPPON NEWS 2010.11.7

全日本選手権フォーミュラ・ニッポン

Rd.7 最終戦・決勝 [鈴鹿サーキット]

Rd.7 最終戦 鈴鹿・決勝 Race2 結果

鈴鹿サーキット (国際レーシングコース 全長 5,807km)

天候：晴れ コース：ドライ 開始時 気温/路面温度： 19 /27

開始/終了時間： 14:34 ~ 15:23

Po	No	Name	Team	Time	Delay	Best time
1	19	J.P・デ・オリベイラ	Mobil 1 TEAM IMPUL	49 31.945		1 43.956
2	36	アンドレ・ロツテラー	PETRONAS TEAM TOM S	49 34.517	2.572	1 44.328
3	32	小暮 卓史	NAKAJIMA RACING	49 35.023	3.078	1 43.216
4	1	ロイック・デュバル	DOCOMO TEAM DANDELION RACING	49 53.683	21.738	1 45.084
5	31	山本 尚貴	NAKAJIMA RACING	49 53.778	21.833	1 44.262
6	20	平手 晃平	Mobil 1 TEAM IMPUL	49 54.259	22.314	1 44.431
7	37	大嶋 和也	PETRONAS TEAM TOM S	49 58.759	26.814	1 44.940
8	16	井出 有治	MOTUL TEAM 無限	49 59.400	27.455	1 44.562
9	3	松田 次生	KONDO RACING	50 15.499	43.554	1 45.826
10	8	石浦 宏明	Team LeMans	50 16.310	44.365	1 45.286
11	2	伊沢 拓也	DOCOMO TEAM DANDELION RACING	50 16.618	44.673	1 45.443
12	10	塚越 広大	HFDP RACING	50 23.082	51.137	1 44.382
13	18	平中 克幸	KCMG	50 24.580	52.635	1 45.638
14	7	ケイ・コッツォリーノ	Team LeMans	50 25.215	53.270	1 45.020
-	29	井口 卓人	DELIZIEFOLLIE/CERUMO・INGING	8 59.993	23Laps	1 46.248

FASTEST LAP: 1'43.216 (20/28) 202.54km/h No.32 小暮 卓史 (NAKAJIMA RACING)

【この件に関するお問い合わせ】

株式会社日本レースプロモーション

広報担当 外間・石原

media@f-nippon.co.jp